教　育　研　究　業　績　書

2025年　5月　1日

氏名　加　藤　裕　明

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
１．教育経営学	「過疎自治体における子育て・教育・まちおこしの一体的な活動にみる自律的論理」日本学術振興会　2023年度科学研究費助成事業基盤研究（C） 課題番号　23K02113（研究代表者）
２．教育方法学	「学びの共同体」、「学校改革」、「探究と協同による学び」

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 １）北海道大学全学教職課程学外講師「進路指導論」（1回）	平成28年10月20日	北海道大学教職課程「進路指導論」の学外講師として、教科教育と特別活動とを結びつけ、生徒を育てる方法について講演を行った。知識と感情相互が豊かに融合された生徒を育てるため、教科教育においてもまた部活動（演劇活動）においても、他の仲間との協働関係を築きながら、生徒が主体的、自治的に活動していく方法について、筆者（加藤）自身の実践を題材とし、それを一般的な形で応用することを趣旨として講演を行った。なお、この講演はサテライトにより、北海道大学水産学部（函館）にもテレビ中継された。
２）北海道教育大学札幌校非常勤講師 「生徒指導、進路指導の理論と方法」（各年度15回）	平成29年4月1日～平成30年9月1日	生徒指導及び進路指導を、対処療法的に行うのではなく、それ自体を教育の営みとして位置づける、という視点、すなわち生徒指導、進路指導を日本における「生活指導」の理論と実践の観点から統一的にとらえ、論じた。具体的には、「山芋」「山びこ学校」に代表される生活綴り方運動、全国生活指導研究協議会の実践の展開を紹介し、それらをP.フレイレの対話理論、J.デューイの民主主義教育の理念の枠組みによって検討し、学生相互のディスカッションを軸に、21世紀の教師に求められる生活指導のあり方を15回にわたり考察した。
３）北海道大学全学教職課程学外講師「教職入門」	平成29年11月7日	北海道大学全学教職課程「教職入門」において、1年生を主体とした約150名の受講生に対し講演を行った。その内容は、「教師の仕事」を教科外教育、特に部活動から考えるものである。部活動は、教師の超過勤務及び生徒の長時間にわたる拘束が問題となっている。一方で、教科教育では得られない教育的意義を持つ活動としての側面も無視できない。この現状をふまえ、部活動を自治的活動として学校教育の中に位置づけ直すことを提起し、学生と議論し、考察した。
４）札幌大谷大学非常勤講師「特別活動論」（各年度15回）	平成30年9月1日～2020年3月1日	本授業において筆者は、高校における「特別活動」の実践を複数紹介した。その上で、学生自身に仲間とともに身体性を伴う仲間づくりの方法としてのエンカウンターを経験してもらい、将来、教職に就いた際、身体感覚をともなった即戦力を発揮できるよう授業を構成した。さらに学生各自に「特別活動」の授業デザインを作成させ、全体で議論するとともに、その理論的背景を、J.デューイのコミュニケーション理論、A.アドラーの共同体感覚、目的論、さらにはP.フレイレの対話理論、民衆解放の理論をふまえながら検討した。学生諸君の授業中の発言、対話も大変積極的なるものがあった。

事　　項	年月日	概　　要
５）札幌学院大学非常勤講師「総合学習と特別活動の指導法」（各年度15回）	平成30年4月1日～2021年9月1日	新学習指導要領を念頭に、中学・高校の「総合的な学習（探究）の時間」及び「特別活動」の指導法をそれぞれ7回、8回に分け授業を展開した。総合学習（探究）、特別活動は、「主体的・対話的で深い学び」そして「活動的な学び」が求められる現代教育改革のための極めて重要な科目であり、それにふさわしい授業デザインのあり方を、実践例にもとづき考察するとともに、学生自身に授業デザインを作成させ、将来、学生が教職に就いた際の実践力を養った。
６）北海道大学水産学部非常勤講師「特別活動論」（各年度8回）	2019年8月1日～現在	他者との関係性を構築するための特別活動は、受験意識一辺倒の高校教育では、ややもすれば学びの埒外に置かれやすい。教職を目指す学生は、座学ではなく、自ら主体的、協働的に他者と関わり、活動することによって特別活動の本来の趣旨を理解し、自ら教師として生徒に向き合う際のスキルとなる。そのような学びが得られるように、実践力を養う授業（活動）を、エンカウンターも手法を用いて、学生主体の学びが得られるよう指導した。
７）北海道文教大学人間科学部こども発達学科教授としての授業実践	2019年4月1日～現在	筆者は左記の期間、主として小学校教諭志望者のために、「教育方法論」、「教育課程の編成と実施」、「教育基礎論」といった教職課程基幹科目および「教科教育法社会」、「社会科概論」の教科等指導法の授業を担当してきた。 また、ゼミ、卒業研究（卒論指導）では、地域の文化遺産と現代コミュニティの関係を探求するため、学生を主として恵庭地域のフィールドワークに連れ出し、参与観察法、インタビュー法の指導を行ってきた。小学校教員採用試験の結果、毎年30名前後の教員（非常勤含む）を輩出した。
２　作成した教科書、教材 １）「教科教育（授業）と教科外教育（部活）による進路指導」（北海道大学全学教職課程「進路指導論」におけるテキスト）	平成28年10月20日	本テキストは、①授業、②「教え」から「学び」へ、③教師、④同僚性、⑤自治活動をキーワードとして、教科教育と教科外教育（部活動）の改善により、生徒が他者との対話や協働に慣れていくこと、卒業後も、その経験をふまえて適応していくことを、加藤自身の実践をもとに提起した。授業に関しては、協働学習の具体的実践方法を、また部活動に関しては、自治的活動の展開の実際、そして卒業後の進路に関しては、卒業生に依頼した記述式アンケートに対する回答をまとめた。
２）「生徒指導、進路指導の理論と方法」（北海道教育大学「生徒指導、進路指導の理論と方法」におけるテキスト）	平成29年4月1日～9月1日	本テキストは、北海道教育大学札幌校において筆者が行った「生徒指導、進路指導の理論と方法」の講義テキストである。教職を志す学生が、教育現場で実際に役立つ指導方法を提示した。生活綴り方運動の実践及び全国生活指導研究協議会が展開した生活指導の理論（竹内常一、城城丸章夫）と実践（大西忠治）、P.フレイレの対話理論、J.デューイの民主主義教育の理念を解説し、「対話」、「集団」、「民主主義」、「指導と管理」、「自治的活動」の5つのキーワードによって、生活指導を実践していくためのテキストとして構成した。
３）「教師の仕事―教科外教育と生徒理解、部活動を中心に―」（北海道大学全学教職課程「教職入門」におけるテキスト）	平成29年11月7日	本テキストは、「教師の仕事」を教科外教育、特に部活動から考えるためのものである。テキストは筆者自身の実践記録をもとにしたオリジナルであり、三つのキーワード（①「生きる力」、②部活の力、演劇の力、③協働的創造性）をもとに、１「教師の仕事」は「教科教育」だけではなく、教科外教育との両輪によって生まれる実効性。２演劇創造活動を通して、生徒が獲得する力の豊かさ。３そのための教師の支援のあり方は、生徒との協働にあること、という三点を軸とする問題提起をまとめたものである。

事　　項	年月日	概　　要
４)「特別活動論」(札幌大谷大学「特別活動論」におけるテキスト)	平成30年10月1日～2020年2月1日	本テキストは、「特別活動」を、受講者が具体的な知識（授業デザインの作成方法）と経験（受動的に受講するのではなく、自ら身体を動かし、仲間とともに活動する経験）を総合して、将来の教師として、特別活動の授業が実践できるようにプログラムされたオリジナルのテキストである具体的には、特別活動の授業にエンカウンターの方法を取り入れ、生徒と生徒がより積極的な人間関係を構築できるよう、アイスブレイキングをはじめ、インタビューや対話など、身体を通した活動的な学びのプログラムを盛り込んでいる。
５)「総合的な学習の時間と特別活動の指導法」(札幌学院大学「総合的な学習の時間と特別活動の指導法」におけるテキスト)	平成30年4月1日～2021年2月1日	「総合学習（探究)」と「特別活動」は、現代公教育の刷新を考える上で、極めて重要な理念と方法を求められる科目である。ややもすれば、「受験教育」の「犠牲」にされかねない科目であるが、むしろ教科教育の理念と方法を刷新するための科目としても、その授業デザインが注目されている。本テキストは、新学習指導要領にいう「主体的・対話的で深い学び」を獲得することを目的として、学生が授業デザインを構築できるよう執筆された筆者のオリジナルテキストである。
６)「特別活動論」(北海道大学水産学部教職課程におけるテキスト)	2019年8月1日～現在	本テキストは、北海道大学水産学部の受講者のために筆者が執筆したオリジナルテキストである。テキストの構造は、受講者が「反転授業」を行うことを前提に編集した。「反転授業」とは、「教師」が「学生」に知識を「伝授」するのではなく、まず学生から、問題意識をもって学校教育における「特別活動」に向きああい、学びを探究することを前提とするアクティブ・ラーニングの一種である。教師から「教える」のではなく、学習者がまず探究し、授業をデザインする中で、テキストを活用し、理論的な枠組みをも、その実践的課題から考えることができるよう構成したものである。
７)「教育方法論」「教育課程の編成と実施」「教科教育法社会」「社会科概論」(北海道文教大学におけるテキスト)	2020年4月1日～現在	筆者の先の期間の本務校における授業テキストである。特に令和2年からはコロナ禍にあったため、左記の科目に関して、ICTを活用し、オンデマンド用授業資料を作成した。「教科教育法社会」に関しては、主として小学校教員を目指す学生のために、日本国憲法および地域教材を活用した授業デザインを、学生がみずから作成できるようになるためのテキストとした。また、「教育方法論」に関しては、小学校教諭および幼稚園教諭志望者のために、対話的な学びの実践を軸とした授業デザイン、活動デザインを紹介した。さらに「教育課程の編成と実施」では、幼小接続の視点を軸に、「遊び」を軸とした学びの探究をカリキュラムに編成し、カリキュラムマネジメントに落とし込めるように解説するテキストとして編集した。
３　教育上の能力に関する大学の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事項	平成元年4月～2019年3月末	札幌市立高等学校教諭としての実務経験(30年間)
１)札幌市立高等学校教諭としての実務経験(30年間)	平成元年4月1日～2019年3月31日	筆者は、左記の30年間にわたり札幌市立高等学校の社会科教諭（正規）として勤務してきた。その間、学習指導、生徒指導、進路指導、部活動指導に従事してきた。また教育実習生を受け入れ、教科教育指導、ホームルーム経営に関する指導にあたってきた。さらに、札幌市教委とともに、市立高校改革に携わってきた。具体的には、合同学校説明会の実行委員（高校側主担当、平岸高校総務部長）として、平成28、29年度、札幌市民に向けた学校説明会を担当した。市立高校の教育理念、教育課程、授業内容、特別活動等を、ICTに組み込んだ、パワーポイント、DVD映像等を活用し、市立高校の魅力化発信に取り組んだ。その結果、札幌市立高校8校中、平岸高校の説明会に参加した市民の数は最多を記録し受験者の倍率も2年間平均で約1.4倍と最大の倍率となった。

事　　項	年月日	概　　要
２）高等学校における教育実習生指導	平成10年4月1日～平成25年3月31日	筆者は、30年にわたる高校教育実践のなかで、特に左記の期間、教職を目指す大学生に対し、札幌藻岩高校、札幌清田高校において、大学から受け入れた教育実習生の指導に当たってきた。また筆者がホームルーム（HR）担任の場合は、HR活動を主とする特別活動をも指導し、可能な限り、生徒と向き合う場面が生まれるよう実習生を指導してきた。その結果、教材（教科書、図説資料等）の読み込みと、発問の重要さ、HRの経営方法等、実習生が主体的に教育に取り組む姿勢を引き出すことが出来た。
３）北海道私立大学教職課程連絡協議会の依頼による令和3年度例会における講演「オンライン授業におけるICT導入とその問題―身体性の観点から―」	2021年7月4日	コロナ禍を機に、広がるオンライン授業の導入とその問題を、学習者―教職課程の学生、及び学校教育における児童・生徒―の身体性から考察した。特に、経産省主導の「未来の教室」及び「EdTech研究会」、そして文科省による「Gigaスクール構想」と、ICT企業の教育界への導入が孕む問題点、及び教育実践の現場において身体性をふまえる際の課題について講演した。
４）「北海道に自由な小学校をつくる会」主催、長沼集会「北海道に自由な小学校をつくるために」指定討論者	2019年8月10日	私立小学校「まおい学びのさと」小学校校長および「学びのさと自由が丘学園」理事長の依頼により、表記の指定討論者を務めた。長沼町において学びのさと小学校が果たす現代的な地域と教育の関係および教育の役割について、パネリストとしてその意義を提起した。
５）北海道文教大学市民公開講座（ワークショップ)「こえ・ことば・こころを動かす演劇ワークショップ」講師	2019年9月～10月	本公開講座は、一般市民向けの演劇ワークショップである。発声、身体表現、他者との関わりといった演劇的な手法のコミュニケーション活動は意外に経験したことのない市民が多かった。現代の孤立を深める現代社会にあって、他者との信頼関係を取り戻し、魅力的な表現を試みることは、市民社会でさらなる機会の提供が必要であることが、参加者の感想から読み取ることができた。
６)恵庭市教育委員会　社会教育委員自主研修会講師。演題「『ENIWA学』の創造―地域の文化を探り、発信する“ひとづくり”のために―」	2019年12月19日	恵庭市教育委員会からの依頼により表記の講師を務めた。加藤が研究代表者となり令和元年8月から開始した北海道文教大学の教育改革プロジェクトENIWA学（ENgeki In Workshop and Activity）は、学生がフィールドワーク及びワークショップを通して、恵庭地域の課題を探究すること、そして、演劇的な表現形式によって社会に文化を発信していこうとする地域文化行動を目的とする。その過程で見えてきた地域の文化とひとづくりのあり方について講演を行った。
７）恵庭市生涯学習委員会「長寿大学」講師。演題「朗読劇『漁川物語』について　―大学教育における地域文化資源の発見と発信―」	2021年11月17日	恵庭市生涯学習委員会からの依頼により表記の講師を務めた。恵庭市の「長寿大学」は高齢者の生涯学習の場である。生涯学習委員である筆者は、受講者にとって身近な恵庭の母なる川を題材にした『漁川物語』を、大学生が朗読劇として上演したプロセスを講演した。参加者の中には、かつて30年前に『漁川物語』を制作した子どもの親も複数おり、終演後、いくつもの感想をいただいた。なかには涙ぐむ参加者もおり「漁川」がいまもなお、恵庭市民に愛されていることが明らかとなった。参加者約100名。
８)北海道文教大学2020共同研究成果発表　公開研究フォーラム講師。演題「『ENIWA学』の課題～地域に生きるひととまちを育てる芸術祭モデルの提案～」	2020年12月26日	本講演は、令和2年度北海道文教大学採択共同研究「地域社会における子ども・地域住民・大学の文化行動に関する研究―北海道文教大学「ENIWA学」を事例とした実践研究―」の研究成果を、市民に公開する形で開催したものである。加藤は共同研究者の研究代表者として、本講演の筆頭発表者を務めた。共同研究者はほかに鈴木敏正、笠見康大、吉岡亜希子。

事　　項	年月日	概　　要
９）オンライン講座 CultureNight2021YouTube講師。演題「中山久蔵と現代―恵庭の子どもたちによる歴史ミュージカル絆花「中山久蔵翁物語」によせて―」	2021年7月16日～20日	北海道文教大学の依頼により、大学を代表して表記のYouTube配信の講演講師を務めた。恵庭市の子どもたち（小中高生）で構成するチーム「絆花」は、10年前から「寒冷地稲作の父」中山久蔵の人生を演劇にした作品「中山久蔵翁物語」の発表を行って来た。本講演は、「中山久蔵翁物語」のいくつかのシーンを取り上げ、そこで、子どもたちが、中山久蔵の人生をどのように表現しようとしていたかを解説し、あわせて中山久蔵の人生を一般市民に向けてわかりやすく解説したものである。
10)北海道文教大学市民公開講座講師。演題「子育てに役立つ教育学」	2021年11月26日	北海道文教大学の依頼により表記の講師を務めた。本公開講座では、現代教育学の研究成果をふまえ、「勉強」と「学び」の違いについて、また「学校」教育から脱却し、より広い視点で教育をとらえかえすこと、および教育の社会的な意味について論じ、「子育て」と「教育」に関わる保護者の日頃の思いを聞き出しながら、「子育て」の課題に対するアプローチの方法を「教育学」の知見に学びながら、参加者とともに対話し、探究した。参加者約30名。
５　その他 １）令和元年度　北海道文教大学学長裁量経費事業の研究代表者。 【事業名】「『ENIWA学』プロジェクト2019（ENgeki In Workshop　and Activity)」	2019年８月１日～2020年3月31日	本事業は、大学生が恵庭市民との協働活動を通して行動力と創造性を高める教育改革プロジェクトである。「EN(エ)・(ニ)IWA(ワ)学」とは、ENgeki In Workshop and Activityの略でもあり、大学生がワークショップを通して恵庭の諸課題を探究する力を獲得し、演劇的な表現方法によって地域社会に提案・発表していこうとする探究、創造活動をさす。またアイヌ語のエン・イワ（尖った・岩）にちなみ、ややもすれば学内のみの机上の学習に埋没しがちな学生が、地域性に目覚め、鋭く恵庭の課題に切り込む問題意識を獲得させんとする教育理念を実践にうつすためのものである。本プロジェクトの成果は、論文のほか、新聞報道（『北海道新聞』『苫小牧民報』）にも取り上げられ、恵庭市教育委員会でも高く評価された。加藤裕明、鈴木敏正、笠見康大、吉岡亜希子による共同研究。
２）令和2年度～令和4年度　北海道文教大学共同研究費(3か年)の採択事業に関する研究代表者。 【事業名】「地域社会における子ども・保護者・市民・大学の連携による文化活動に関する研究―北海道文教大学『ENIWA学』を土台とした実践研究―」	2020年８月１日～2022年3月31日(3年間)	本共同研究では、「ENIWA学」(2019）の成果をふまえ、講演会発表、論文掲載等により、令和2年度は、①恵庭及び恵庭のモデルとなる道内外の地域文化活動の状況を明らかにした。②舞台芸術の創作及びそのための準備により、活動の過程を明らかにした。令和3年度は、①道内外の文化活動状況を継続して調査し、明らかにした。②文化活動を本学学生とともに実践し、その過程を、質問紙調査やインタビュー調査によって学生はじめ活動参加者の意識を明らかにした。令和4年度は、実践研究総決算として「恵庭舞台芸術祭」(仮称）を開催し、地域の活性化に果たす文化創造の過程を明らかにした。以上の成果を得た。加藤裕明、笠見康大、吉岡亜希子、西野美穂、小山田健の共同研究。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
１　資格、免許	昭和63年3月25日	中学校教諭一級普通免許状（社会科） 高等学校教諭二級普通免許状（社会科）
２　特許等	平成31年3月25日	上記免許更新講習修了 （平三〇第四三九七号）
３　実務の経験を有する者についての特記事項	平成元年4月～2019年3月末	札幌市立高等学校教諭としての実務経験(30年間)
１）札幌市研究開発事業「アイヌ民族に関する教育の充実」に係る実践研究会研究推進委員	平成29年4月1日～2020年3月31日	札幌市教育委員会からの依頼により、札幌市立高校を代表し、左記の委員を3年間務めた。「アイヌ民族に関する教育の充実」に係る実践研究会研究推進委員の高校代表として、札幌市教育委員会及び他の小・中の教員とともに、アイヌ民族の歴史・文化に関する研究および授業づくりを行った。その研究成果を、高校における具体的な授業実践にまとめ、札幌市教育委員会編『アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料　第六集』(活字業績参照）に執筆した。

事　　項	年月日	概　　要
２）恵庭市社会教育委員、恵庭市生涯学習委員	2020年4月1日 ～現在	恵庭市教育委員会からの依頼により、左記の委員を務めている。行政上の具体的な成果は、社会教育委員ならびに同生涯学習推進委員として、「第5期恵庭市生涯学習基本計画」の策定に取り組み、冊子にまとめ。恵庭市のホームページにアップしている。現在、筆者は、「第5期恵庭市生涯学習基本計画」にしたがって、生涯学習の実践とその評価に関わっている。
３）北広島市緑陽中学校区学校運営協議会委員長	2023年4月1日 ～現在	北広島市教育委員会からの依頼により、左記の職を務めている。具体的には学校運営協議会委員長として、北広島市立緑葉中学校、同緑が丘小学校の教師はじめ、他の委員と協力し、緑葉中学校区におけるコミュニティ・スクールの実践に取り組んでいる。特に、学校運営協議会の役割を明確にするとともに、学校運営協議会の課題でもある、学校カリキュラムに地域住民として関わることができるような取り組みを計画し、学校教育が地域に開かれたものとなるよう活動している。
４）札幌市教育委員会事務点検評価委員(学識経験者)	2024年4月1日 ～現在	札幌市教育委員会からの依頼により先の職を務めている。「札幌市教育振興基本計画」および「札幌市教育アクションプラン」による札幌市の学校教育、社会教育に関する事業・取り組みについて、教育委員による自己評価、成果等について、学識経験者の立場から意見を述べる立場にある。
５）北海道札幌白陵高等学校学校運営協議会会長	2025年4月1日	北海道白陵高等学校からの依頼により、左記の職を務めている。具体的には学校運営協議会会長として、白陵高校の教師はじめ、他の委員と協力し、白陵高校におけるコミュニティ・スクールの実践に取り組んでいる。特に、学校運営協議会の役割を明確にするとともに、全国の学校運営協議会の課題でもある、学校カリキュラムに地域住民として関わることができるような取り組みを計画し、カリキュラムとりわけ探究学習において、学校教育が地域に開かれたものとなるよう活動している。
６）北海道・札幌市公立学校教員採用に関する協議会委員	2025年5月1日	近年問題となっている、教員不足に対し、教員養成課程を持つ大学教員として、その対策をはじめ、今後の北海道・札幌市における公立学校の教員養成のあり方について、意見を述べる立場にある。
４　その他 恵庭市学力・体力推進委員	2022年4月1日 ～現在	恵庭市教育委員会の評価により「学力・体力向上推進会議委員」に任命された。恵庭市の学力向上のための地域やコミュニティ・スクールとの連携、地域おこし協力隊との連携・協働のあり方、」さらには学力向上と不登校児童・生徒削減のための授業改善の方法と研修のあり方等について提言している。また「体力」については、平成29年度に制度化された部活動指導員の積極的な活用と、部活動の地域以降による健全な「体力向上」の方途について提言した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １. 札幌市教育委員会編『アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料第六集』	共著	2020年3月	札幌市教育委員会	本書は、学校においてアイヌ民族の歴史と文化を学ぶための最新の指導資料集である。筆者は、実際に高校で実践した授業デザインをもとに、あらたに三点の授業デザインを提供した。すなわち、「アイヌ語地名を探せ」、「クナシリ・メナシの戦いと異酋列像」、「アイヌ文化の継承と発信―知里幸恵の生涯」の三点である。高校の総合探究や歴総合での授業実践を想定してまとめたものである。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） ２．北海道文教大学編『現代社会の食と栄養を考える』	共著	2022年3月	北海道文教大学出版会 （加藤執筆部分 pp.16-17）	本書において筆者は、「寒冷地稲作の父」と称される中山久蔵の事績をコモンズ（社会的共通資本）の観点からとらえ直した。久蔵は、北海道における「稲作の父」と称されるが、現代的視点でとらえるとき、より重要な側面は、米（種もみ）をコモンズ（社会共通資本）として扱った点である。つまり、全道各地で稲作を志すひとびとに種もみを無償頒布した。それは、明治11年にイナゴの被害で壊滅的な被害を受けた年も変わらなかった。久蔵を通して、現代における食の問題をコモンズの営みから考察したものである。
３．北海道文教大学編『大学における地域連携を考える』	共著	2023年5月	北海道文教大学出版会 （加藤執筆部分 pp.14-17）	筆者は、共同研究「ENIWA学」を主宰し、学生とともに二本の朗読劇の創造に取り組んだ。第一に、恵庭の母なる川の歴史と動物そして人間を題材とした『漁川物語』である。第二に、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を恵庭におきかえ、ジョバンニとカンパネルラが縄文のカリンバ遺跡の人々と出会い、対話を交わす『銀河鉄道とカリンバの夜のために』である。本書において筆者は、以上二本の朗読劇の創作と上演までのプロセスをまとめた。
(学術論文) １.演劇教育における教師の支援－札幌Ｋ高校『K版　ロミオとジュリエット』上演を事例として－	単著（査読論文）	平成25年3月	北海道教育学会『教育学の研究と実践』第8号、 pp.31-40	本論文は、教育の基礎(原理)たる学びの主体性、協働性に特に焦点をあて、教師はどのような支援を行ったのかを明らかにした学術論文である。具体的には、地域社会における活動において、子どもたちの能力向上の過程には、ひとつの目的に向かって、積極的に対話を重ねる同志的連帯関係があることを明らかにした。
２.演劇教育における高校生の創造的対話空間の形成―『K版星の王子様』上演過程における教師の支援のアクションリサーチ	単著	平成26年6月	北海道大学大学院教育学研究院『教育学研究院紀要』第120号、 pp.231-253	本論文は、教育の原理たる主体的、対話的、活動的な学びの面から、地域の公共ホールを活用した子どもたちの演劇活動を記述し、考察したものである。『星の王子さま』の発表に至るまでの活動過程を対象とし、参与観察法とアクションリサーチによって分析した結果、子どもは対話によって仲間との関係性を築くこと、地域に開かれた活動によって、意欲や主体性を高めることを明らかにした。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） ３.演劇教育による教師の学び－高校演劇の指導過程における教師の変化－	単著（査読論文）	平成26年8月	日本演劇学会 演劇と教育研究会『演劇教育研究』第5号、pp.25-37	本論文は、教育の基礎的方法として、活動的な学びをデザインする際、教師は子どもとどのように向き合うのかを問題意識とし、高校生の活動の指導過程に焦点をあて、支援のあり方を具体的に明らかにした。具体的には、2013年秋を現在時点として、2006年度から現在に至る過程で教師がどのようにその支援方法を改善したか、その過程を、子どもや同僚の対話から分析し、その質的変化の意味を明らかにした。
４.演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究―演劇部活動における高校生の変化―	単著（博士学位論文）	平成28年3月	北海道大学大学院教育学院、教育学博士学位認定論文（北海道大学学術成果コレクションHUSCUPにて一般公開されている）	本論文は、教育の基本理念としての協働性、創造性に焦点をあて、これまでの国内・外における教育思想や学習理論をふまえた上で、それらを高校生がいかに高めるかを明らかにした実証研究である。従来の創造性研究は、専ら個人を対象にし、集団の相乗的なダイナミズムは等閑に付されてきた。本論文は、演劇という協働を必須とする活動の全過程に焦点をあて、3年間に渡るリサーチによって、生徒の創造性が協働によって相互に高まる過程を明らかにした。その結果、本論文は先行研究の未開拓分野を埋める研究として、北海道大学大学院から教育学博士学位を認定された。（A4版205頁）
５．授業論：北海道古代史の授業―高校日本史における「進歩・文明史観」相対化の試み―	単著	平成28年3月	北海道地域文化学会『北海道地域文化研究』第8号、pp.67-86	本論文は、高校新学習指導要領の「日本史探究」をみすえ、地域史を軸に、歴史認識を深める探究のあり方を考察したものである。実際の指導過程では、考古学的な実物教材（黒曜石、写真、図版、地図等）を提示し生徒に協働と探究により発言を促し、単元の最後に小レポートとして考察をまとめさせた。生徒が輪番で記す「授業日誌」や小レポートの記述内容をテキストデータとして活用する質的研究法を用い、生徒の学びを具体的に明らかにした。
６.高校生の自治的活動づくりの経験―高校演劇部の活動過程に着目して―	単著（査読論文）	平成29年8月	日本生活指導学会『生活指導研究』第34号、pp.51-64	本論文では、高校生の演劇活動が、自治的、民主的な集団作りの場として、自ら考え、主体的、協働的に活動していく拡張的な学習の場として機能すること、そして教師の支援のあり方との関係を考察した。それをふまえ、高校生の部活動（演劇）を対象に、参与観察及び当事者（生徒）が残した各種のテキストデータにもとづき、活動する高校生の自治活動づくりの過程を記述し、活動に向かう高校生の経験の意味を明らかにしたものである。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） ７.協働学習における教師の支援―高校日本史授業のアクションリサーチ―	単著（査読論文）	平成29年9月	北海道教育学会『教育学の研究と実践』第12号、pp.37-46	本論文は、ヴィゴツキー「発達の最近接領域説」、レイヴとウェンガー「正統的周辺参加」理論、さらにはデユーイのコミュニケーション理論等をふまえ、学習とは、個人がバラバラに活動して起きるものではなく、ひとりひとりが他者との関係の中で生み出すものであること、その学習過程を筆者自身の授業（日本史）を題材に、生徒の「授業日誌」や小レポートの記述内容をテキストデータとして明らかにしたものである。
８.総合学習における教育内容の検討－高校におけるアイヌ史学習の主体的､協働的な学びの視点から	単著	平成29年3月	北海道地域文化学会『北海道地域文化研究』第9号、pp.74-94	本論文は、高校の教育課程における「総合的な学習の時間」と、日本史教育とを、いかに接続させるのか、その具体的な方法を論じたものである。本論では特に、総合学習を現今の教育課題を照射し、それを改革する可能性を含むものとして位置づけ、受験準備のためだけでなく、学習が本来内包しているはずのレリバンス、すなわち現実的な関わり（地元・北海道との現実的な結びつき）を実感し、探究出来るような総合学習の内容を示した。
９.新教育課程に向けた総合学習の教材及び教育内容に関する検討－「キャリア教育｣の課題をふまえて－	共著（筆頭著者）	平成30年3月	札幌大谷大学『札幌大谷大学社会学部論集』第6号、pp.22-45 加藤執筆部分20頁	本論文は、新教育課程の「総合探究」をにらみ、その教材・教育内容について、「キャリア教育」のあり方と結びつけ、具体的、反省的に分析を行った。その結果、従来の「キャリア教育」の問題点をふまえ探究できるような自主教材（ワークシート）の作成方法、及びインタビューによる職業、労働に関する具体的な取材方法、そしてそれらをまとめ、発表に至るまでの生徒の活動と教師の支援を明らかにした。加藤裕明、荒井眞一との共著。
10. 新教育課程における総合的な探究の時間と特別活動及び教科との連携―国際理解教育の教育内容を事例として－	単著	2019年3月	札幌大谷大学『札幌大谷大学社会学部論集』第7号、pp.173-195	本稿は、高等学校の新教育課程「総合探究」の実施を見据え、実際の国際理解教育の指導実践例を題材として、これからの総合探究のあり方を、特別活動及び教科教育との連携から検討・考察を行ったものである。「主体的・対話的で深い学び」を、生徒の活動を軸に展開していく指導のあり方を、生徒の「授業日誌」や小レポートの記述内容をテキストデータとして具体的に提起した論文である。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 11. 高等学校の新教育課程をふまえた日本史教材及び教育内容、教育方法の検討（Ⅰ）－明治編―	単著	2019年3月	札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部『紀要』第49号、pp.95-107	本稿は、高校の新学習指導要領における必履修科目「歴史総合」を対象に、その実践上の課題を批判的に検討したものである。特にその国家主義的視点を明らかにした上で、生徒が近現代史を批判的にとらえることができるような授業を構築する過程を記述した。その際、生徒の主体的で活動的な学びに着目しながら、生徒の「授業日誌」や小レポートの記述内容をテキストデータとして具体的に明らかにした。
12. 高等学校の新教育課程をふまえた日本史教材及び教育内容、教育方法の検討（Ⅱ）－大正編―	単著	2020年3月	札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部『紀要』第50号、pp.171-182	本稿は、高校の新学習指導要領における必履修科目「歴史総合」の問題点をふまえ、生徒が市民的な立場に立って大正史を批判的にとらえることができるような授業をデザインした。その過程を、参与観察や質問紙調査によって明らかにした。生徒の主体的で活動的な学びが起こるような授業デザインの方法ともあわせて具体的に近現代史教育のあり方を、教材論、カリキュラム論の観点から提起した。
13. 社会参画型教育における大学生の学び-大学教育改革プロジェクト「ENIWA学」におけるフィールドワークを事例として-	単著	2020年3月	北海道地域文化学会編『北海道地域文化研究』第12号、pp.25-41	本論文は、筆者が主催し、学生2名と共に取り組んだ、ENIWA学（ENgeki In Workshop and Activity）の実践として、地域の子どもたちの演劇活動をフィールドワークした観察記録をもとに、大学生の学びを具体的に論じたものである。学生は、リアルな子どもたちの姿に接する中で、子どもの学びをどのように見とるのか、普段の机上の講義からは得られない視点を獲得したことを明らかにした。
14. 高等学校の新教育課程をふまえた日本史教材及び教育内容、教育方法の検討（Ⅲ）－昭和編―	単著	2021年3月	札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部『紀要』第51号、pp.13-28	筆者は、高校の新教育課程における必履修科目「歴史総合」の問題点をふまえ、生徒が昭和史の学習を通し、現代社会を批判的にとらえることができるよう授業を実践した。本稿は、その過程を、参与観察および質問紙調査によって明らかにしたものである。生徒の主体的で活動的な学びが起こるような授業デザインの方法を具体的に記述し、近現代史教育のあり方を、教材論、カリキュラム論の観点から提起した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 15. 地域社会参画型教育における大学教員の支援―大学教育改革プロジェクト「ENIWA学」における朗読劇『漁川物語』上演を事例として-	共著(筆頭著者) 査読論文	2021年3月31日	北海道文教大学『文教大学論集』第22号、pp. 1-13 加藤執筆部分12頁	本論文は、全人的な発達のための教育の基礎としての協同活動、地域参画をキーワードとして、教育者としての基本的な資質を獲得するための大学教師の支援を明らかにしたものである。具体的には、地域の歴史と文化を取材し、学生自身が市民の前で表現する朗読劇の創造課程を、学生に対するインタビューや、レポート内容をテキストデータとして明らかにしたものである。加藤裕明、吉岡亜希子、笠見康大、鈴木敏正による共著論文。
16. 地域資源を活かしたアート系ワークショップの創出―共同研究 ENIWA 学におけるカリンバ遺跡を題材にしたベンガラ染め体験を事例に―	共著	2022年3月	北海道文教大学『文教大学論集』第23号、pp. 49-61 加藤執筆部分8頁	本稿は、子どもたちが、地域の歴史に学び、ベンガラ朱を巨大な布に染め野外アートにして展示する活動を通して、教育の基礎たる全人的な発達に向かうためのワークショップの過程を、参与観察記録や、学生へのインタビュー記録をテキストデータとして明らかにしたものである。活動過程では大学生が将来子ども支援にあたる際の基本的資質を獲得する過程をも明らかにした。笠見康大、加藤裕明、吉岡亜希子、西野美穂、小山田健による共著論文。
17. 「地域おこし協力隊」の活動における意義と課題―北海道鷹栖町パレットヒルズのマネジメントを事例として―	共著	2022年3月	北海道文教大学『文教大学論集』第23号、pp. 39-48 加藤執筆部分5頁	本稿は、北海道鷹栖町において活動する「地域おこし協力隊」の隊員および、鷹栖町役場職員にインタビュー調査を行い、地域の活性化における地域おこし協力隊と町教委との連携の在り方を明らかにしたものである。具体的な事業としては、町内のパレットヒルズを、町内外の市民に親しまれる場にするための取り組みとその成果および課題を具体的に明らかにしたものである。小山田健、加藤裕明による共著論文。
18. 教員志望学生のキャリア意識と地方自治体の教員養成政策　―北海道教育委員会「草の根教育実習」の実践過程に着目して―	共著	2022年3月	北海道文教大学『文教大学論集』第23号、pp. 27-38 加藤執筆部分4頁	本稿では、大学生に対する質問紙調査とインタビュー調査結果、および自治体に対する質問紙調査結果をもとに、学生の小規模校での教職イメージと、過疎地が求めるそれとのズレを明らかにした。コロナ禍により実習は出来なかったが、学生が小規模校での実習をイメージしながら、あらためて教職の魅力を考える機会になったこと、さらに小規模校での実習への思いを強くしたことが明らかとなった。相馬哲也、加藤裕明、高桑純による共著。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 19. ICT導入をめぐる教育方法論上の諸問題―身体性、特に「皮膚感覚」から考える―	単著	2022年3月	北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会『会報』No.41、pp.12-23	本論文は、北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会における研究発表をふまえ、同協議会の年次『会報』に寄稿した論文である。近年の教育現場へのICT導入をめぐり、国際的にも議論となっている教育における本質的な問題を取り上げ、教育の基礎たる人間の全人的な発達を目指すための、五感、特に皮膚感覚の観点からふまえるべき問題を明らかにしたものである。
20.「社会に開かれた教育課程」論の実践的研究に向けた予備的考察	単著	2022年10月	北海道文教大学人間科学部こども発達学科『紀要』第3号、pp.2-7	本論文は、北海道を代表とする過疎自治体において、商店街がシャッター街となり、鉄道が消え、学校が消える事態に直面している現在、教育の基本的理念すなわち「どのような教育がより良い教育か」を考え、「社会に開かれた教育課程」を実践し、研究するための先行研究の整理および課題となる論点を整理した予備的研究に位置づけられる論文である。
21. 自然環境における子どもの遊び、学びの見とり―保育者・教育者養成に向けた理論的、方法論的検討	共著（筆頭著者）	2022年10月	北海道文教大学人間科学部こども発達学科『紀要』第3号、pp.8-21 加藤執筆部分10頁	本論文は、教育の基礎的実践たる自然体験活動を対象とし、参与観察法およびインタビュー法により、どのようなこどもの遊びと学びを見とることが出来るのかを、大学生の活動から記述したものである。教育課程の編成を構想する際、体験的、活動的な学びが、子どもと大学生双方にとって、机上の学びとは全く異なる、「より良い教育」の根本的なありかたにつながる視点を獲得させることを明らかにした。加藤裕明と渡邉尭宏による共著。
22. 地域社会における文化的ソーシャルキャピタルの形成―北海道文教大学共同研究「ENIWA学」と島松「夢創館」との協働事業「風と大地の芸術祭2021」をふまえて	共著（筆頭著者）	2023年3月	『北海道文教大学論集』第24号、pp.47-59 加藤執筆部分11頁	本論文は、恵庭市島松の市民ホール「夢創館」において、筆者らが、実際に芸術祭を開催し、その過程をアクションリサーチにより明らかにした。また、「夢創館」が、地域における文化的ソーシャルキャピタルとしての役割を果たしていること、そしてその運営の中心をになう館長に、長期にわたる調査を行い、「夢創館」の歴史と現代の取り組みの面から明らかにしたものである。加藤裕明、西野美穂、笠見康大、吉岡亜希子、小山田健の共著。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 23.「令和の日本型“個別最適な学び”」と北海道における教育実践―北海道留辺蘂高校における教科「福祉」の実践を視座として―	共著（筆頭著者）	2023年3月	北海道教育学会『教育学の研究と実践』第18号、pp.20-33 加藤執筆部分12頁	本論文は、「個別最適の学び」を、国際的視点から批判的にとらえなおし、孤立・分断を深める地域と子どもたちにとって、「どのような教育がより良い教育実践」であるのか、瑠辺蘂高校における後藤幸洋の実践を、インタビュー調査と訪問調査結果とを合わせて分析し、地域に開かれた教育課程を視野に、探究と協働の実践が、子どもたちの自己肯定感と地域と仲間に対する愛着を深めていく教育方法であることを論じた。加藤裕明、後藤幸洋の共著論文。
24. へき地小規模校支援・地域貢献（草の根教育実習）推進事業に関する調査報告(1)	共著	2023年3月	北海道文教大学『北海道文教大学論集』第24号、pp.91-105 加藤執筆部分5頁	本稿では、北海道教育委員会主催「草の根教育実習」に参加した大学生および実習を受け入れた自治体、小学校関係者に対してインタビュー調査を行い、その結果を報告した。学生は当初、小規模校へのイメージや知識を持っていなかったが、実習を通し、ひとりひとりの子どもたちに向き合う経験を得、教師への志望をより明確なものにしていったことが明らかになった。相馬哲也、加藤裕明、高桑純、村越含博、村田敏彰による共著。
25. へき地小規模校支援・地域貢献（草の根教育実習）推進事業に関する調査報告(2)	共著	2024年3月	北海道文教大学『北海道文教大学論集』第25号 加藤執筆部分5頁	北海道教育委員会が企画する事業に学生を参加させる中で、意識の変容等を調査し、学生に与える影響等を調査するとともに、地域の教育委員会の考える「学校教員の地域貢献」の意識を調査もの。5年計画の2年目学生が学校体験を行った校長等への聞き取りからは、草の根教育実習に参加する本学の学生への高い評価とともに、地域貢献を教員に期待することが、働き方改革の流れと整合しないといった懸念が示された。これからの教員には「教師として」ではなく「地域住民として」地域に関わることが求められることなどを指摘した。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 26.地域教育経営における教育長のリーダーシップ－北海道安平町における「学社融合」とコミュニティ・スクールの導入過程に着目して－	共著	2025年3月	北海道教育学会『教育学の研究と実践』第20号、pp.1-12 加藤執筆部分11頁	北海道安平町は、「学社融合」を目指し、2018年時点において町内すべての学校にCSを導入した。そこには当時の教育長Aの「強力なリーダーシップ」があったとされる。本研究では、教育長のリーダーシップを、安平町に焦点をあて地域と学校の関係から明らかにした。それは、「社会に開かれた教育課程」を実践し、地域共同体の再生を志向する上で、教育委員会とりわけ教育長の役割に関し、新たな議論を生む一助となった。本研究では、なお本研究は、JSPS科研費（23K02113）の一部を活用したものである。
（口頭発表、講演等） １.演劇教育による創造的コミュニケーション力の育成―札幌K高校演劇部『K版星の王子さま』の創造過程に着目して―	単	平成26年3月	北海道教育学会第58回研究発表大会、於北海道大学	本発表では演劇制作過程において高校生が創造性をどのようにして高めたかを考察した。先行研究では生徒の学びが実践者のねらいと切り離された形で論じられる傾向があり、学びが実践者との交流により変化する動的な側面が稀薄である。本発表では研究者である筆者が生徒と共に活動に参加し、教師の支援が生徒の学びとどう関わるのか、その様相をアクションリサーチによって具体的に描き出した。
２. A Case Study of Performance of “The K-Version of ROMEO AND JULIET” at theSapporo K-High School,Japan	単	平成26年7月	IFTR(International Federation for Theatre Research)=国際演劇学会、於英国Warwick大学	本発表は、国際演劇学会における英語によるパワーポイントを用いたプレゼンテーションである。内容は、札幌の公立高校生が上演した「ロミオとジュリエット」の生成過程を題材に、教師は生徒に対しどのような支援を行ったのか、その実際と生徒の反応の報告である。総合考察として、教師の役割と、生徒の活動との関係性に関する仮説的理論として「二重螺旋的関係性」(A relationship of double helix)を提示した。
３.高校演劇部活動と学習理論の関係性の検討―エンゲストローム及びベイトソンの学習理論に照らして―	単	平成28年3月	北海道教育学会第60回研究発表大会、於北海道教育大学	本発表は、演劇活動を通した高校生の「学び」が、エンゲストロームの拡張的学習理論、ベイトソンの階層的な学習理論に照らし、どのような位置づけにあるかを考察したものである。両者は、現代において矮小化する学校教育の閉塞状況を打開し、新しい実践を切り拓く理論的可能性を持つ。本発表において筆者は、以上をふまえ、現代の学校教育の課題を明らかにし、今後の学校教育活動がとるべき方向性を提起した。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（口頭発表、講演等） ４.高校生の自治活動づくりの経験―高校演劇部の活動過程に着目して―	単	平成28年9月	日本生活指導学会第34回大会、於北海道大学	本発表は、高校生の自治活動づくりと教師の支援過程を明らかにしたものである。高校生の自治活動は、民主的な集団作りの場であり、18歳選挙権の成立を背景として、高校生が自ら考え、主体的、協働的に判断する力を身につけさせていく拡張的な学習の場である。本発表では、高校の部活動（演劇）を対象に、長期にわたる縦断的な参与観察記録およびインタビュー記録にもとづいて高校生の自治活動づくりに向かう経験の意味を考察した。
５．演劇による地域行動:学生参画型プロジェクト「ENIWA学」の開発	共（筆頭発表者）	2020年2月16日	日本演劇学会 演劇と教育研究会	本発表は、北海道恵庭市の文化的課題（「読書・演劇・まちづくり」）を学生と共に探究し、その課題を、先行研究をふまえ考察した。そして、演劇づくりによって文化の発信をする大学教育改革のプロジェクト「ENIWA学」の開発過程を、学生へのインタビュー調査や参与観察記録によって具体的に描き出し、それらをふまえ、現代における大学生の教育課題を論じたものである。加藤裕明、吉岡亜希子、笠見康大との協同発表。
６.地域の特色を活かしたワークショップの創出カリンバ遺跡をテーマにしたベンガラ染め体験を事例に	共	2021年12月12日	環境芸術学会	本発表は、恵庭市の文化遺産である縄文のカリンバ遺跡を、より多くの市民、とりわけ子どもたちに知ってもらうために取り組んだ造形ワークショップのねらいとプロセスをまとめたものである。カリンバの象徴であるベンガラを用い、巨大な染色アート（垂れ幕）に仕上げた。その過程で、子どもたちは、カリンバ遺跡の認識を深め、他者と共に活動することの喜びを表現した。笠見康大、加藤裕明、西野美穂、吉岡亜希子、小山田健によるオンライン共同発表。
７.教員志望学生のキャリア意識と地方自治体のインセンティブ―北海道教育委員会「草の根教育実習」の実践過程に着目して―	共（筆頭発表者）	2022年2月18日	北海道教育学会 第66回研究発表大会	本発表では，教員のなり手不足解消と過疎自治体における関係人口の創出を目的とした，北海道教育委員会の「草の根教育実習」を対象とし、参加した学生のキャリア意識と，地方自治体の受け入れ意識とを分析した。質問紙調査、インタビュー調査の二つの研究方法によって得られたデータをもとに、両者の意識と、その関係性を考察し、報告した。加藤裕明、相馬哲也による共同発表。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（口頭発表、講演等） ８.大学で重視される学び（講演）	単	2024年1月29日	令和6年度札幌大谷高校2学年講演会	本講演は、札幌大谷高等学校2年生305名および同校教師に対して行ったものである。大学進学を目指すにあたり、高校までの学びと、大学で重視される学びにはどのような違いがあるのかについて、特に21世紀型の学びに不可欠な、アクティブ・ラーニングを、ワークショップ形式によって高校生に身をもって経験してもらった。
９．子育て・教育を核とした地域づくり ～安平町を事例として～（講演）	単	2024年2月14日	令和6年度 市町村長政策研究会(北海道総合研究調査会セミナー)	本講演は、道内市町村の首長、教育長に対して行った講演である。子育て、教育を地域が一体的に担うことで、地域づくり、地方活性化をいかにはかるか、そのための理念の重要性、具体的な地域教育経営の実践方法を、北海道安平町を事例として発表した。質疑応答を含め2時間にわたる熱心な討議が行われた。
10.北海道安平町における「学社融合」とコミュニティ・スクールの導入過程	共（筆頭発表者）	2024年3月15日	北海道教育学会 第68回研究発表大会	安平町は、民間や道立という管轄外の機関を含むすべての保育・教育機関にコミュニティ・スクールを導入した極めて稀な自治体である。本発表では、この背景にある、地域と学校を一体的にとらえ、「学社融合」の理念を実践しようとする当時の教育長はじめ、教育委員会内の自律的な地域教育経営の自律的論理を考察した。
11.保育者になっていく過程～三津橋正美における自己エスノグラフィー～	共（第二発表者）	2024年3月16日	北海道教育学会 第68回研究発表大会	本発表の目的は、三津橋（横山旧姓）正美が、保育園で出会ったN保育者との関わりを、自己エスノグラフィーを用いて記述し、「保育者を目指し、保育者になっていく過程」の意味を考察することである。本発表では、正美とN先生との関わりを、自己エスノグラフィーによって記述し、三津橋正美が保育者になっていく過程が持つ意味を考察する。特に、今回、自己エスノグラフィーで描く範囲が、正美の幼少期であることに鑑み、「N先生は、どうして、自分の子どもじゃない私にやさしくできるんだろう？」という問いが、幼少期の正美にいつ、どのようにして生まれたのか、について考察した。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（口頭発表、講演等） 12.　「教育供給主体の多元化」と地域教育経営の自律的論理―北海道安平町における「学社融合」実践を事例として―	共（筆頭発表者）	2024年6月8日	日本教育経営学会 第64回研究発表大会	本発表では、「教育供給主体の多元化（多様化）」と呼ばれる動きがはらむ問題と、同時にその動きが併せ持ちうる子どもたちの学びにとっての肯定的な意味あいを整理しながら、地域教育経営の自律的な論理を考察し、明らかにした。具体的なフィールドは北海道安平(あびら)町(ちょう)が展開する「学社融合」の実践「あびら教育プラン」（後述）である。
13. 地域・産業と連携した大学教育の実践－北海道安平町における学生のフィールドワークを事例として―（講演）	単	2024年10月20日	第2回IDE高等教育研究セミナー	本講演は、高等教育における大学生のより良い学びのデザインを目指し、地域と連携したフィールドワークの実践を報告したものである。札幌大谷大学社会学部地域社会学科3年生の「専門演習Ⅰ」・「地域課題研究Ⅰ」および2年生の「地域教育政策」におけるフィールドワークに焦点をあて、大学生が、北海道安平町において地域・産業と連携しながら学ぶ過程を報告した。
14. 子育て・教育を核とした地域づくりの 取り組み- 北海道安平町を事例として―（講演）	単	2024年11月21日	JICA青年研修「地元資源を活用した産業振興(地域産業振興）A」 「若者を捲き込んだ地域資源の再発見」	本講演は、中央アジア（カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）から日本に派遣された国費研修生に対して行った講演である。子育て、教育を地域が一体的に担うことで、地域づくり、地方創生ひいては国づくりをすすめるための理念、方法を、北海道安平町を事例として発表した。質疑応答を含め3時間にわたる熱心な討議が行われた。
15. 「新しい公共」による地域教育経営―北海道安平町を事例として―	共（筆頭発表者）	2025年3月8日	北海道教育学会 第69回研究発表大会	本発表では、「新しい公共」と呼ばれる動きが、従来の地域教育経営論に与える意味を、北海道安平町の実践を事例として考察した。文科省のすすめる「地域とともにある学校」づくりは、実践としては、依然としてその多くが教育課程外の活動に留まっている。これに対し安平町は、CSとは別に、民間企業に事業委託を行い、地域教育経営を実践する。本発表では安平町における「新しい公共」の活動を分析し、その活動が従来の地域教育経営論に与える意味を考察し、明らかにした。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（口頭発表、講演等） 16.大学で重視される学びとこれからの社会に必要とされるもの	単	2025年4月25日	令和7年度札幌大谷高校3年生PTA講演会	本講演は、札幌大谷高等学校3年生約200名およびその保護者、同校教師に対して行ったものである。進路決定に際し、高校生およびその保護者が、これからの社会で必要とされるものとは何か、について、アクティブ・ラーニング形式で学び合った。21世紀の予測不可能な社会に向かい、どのような学び方が有効であるのかについて考え、対話した。
（その他:高等学校研究紀要等への投稿論文） １.「異文化理解」及び「国際平和学習」を目的とした海外見学旅行実践報告―札幌清田高校第37期グローバルコース見学旅行/マレーシア、シンガポール	単著	平成25年3月	北海道札幌清田高等学校『紀要』第38号、pp.47-54	本稿は筆者自身の勤務した高校における実践研究である。具体的には、平和学習、国際理解、国際交流を目的として、教科横断的にカリキュラムを構成するという授業構成の基本的方法を明らかにしたものである。具体的には、マレーシア、シンガポールへの海外研修に向かう過程で、高校生がいかなる学びを経験したのか、その具体的な学びの意味を明らかにした。
２.「主権者教育と『政治的中立性』」	単著	平成28年3月	札幌平岸高等学校『研究紀要』第36号、pp.18-22	本稿は、2014年10月の文科省による「主権者教育」推進に関わる通知、及び2016年8月の文科省初等中等教育局教育課程課教科調査官による講演「学校における政治的中立の確保や高校生の政治活動についての留意点」をふまえ、高校現場において「主権者教育」をいかにして行うべきか、18歳選挙権の行使をふまえ、主権者としての姿勢を教授する際の方法及び留意点について論じたものである。
３.新しい教育課程を見据えた教材、教育内容、授業改革の検討―全国的な実践の動向をふまえて―	単著	平成30年3月	札幌平岸高等学校『研究紀要』第38号、pp.15-21	本稿は、新学習指導要領をみすえ、教育活動の基本的目標・理念たる「主体的、対話的で深い学び」を、いかにして学校教育の中で実践するか、具体的な教育実践を対象として、今後、いかなる授業づくり、学校づくりを目指すべことによって、その学校の教育改善につながるか、その方向性を分析したものである。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（新聞掲載記事、雑誌等寄稿文） １．新聞掲載記事 「遺書　ある球児の残像　北海道戦後70年 高校の創作劇」	共著	平成27年8月26日	「朝日新聞」平成27年8月26日付朝刊	旧制北海中学出身の甲子園出場投手・坪谷幸一を主人公にした筆者の高校演劇創作劇に関し、その創作過程について取材を受け、「北海道戦後70年」の特集記事として掲載された。坪谷は学徒出陣により特攻隊員として出撃した人物である。劇は高等学校文化連盟石狩支部大会で最優秀賞を受賞し、全道大会でも優良賞を受賞した。その後話題を呼び、名寄市立大学の学生によって再演された。その経緯が上記の記事によって詳しく報道された。
２．「弱い子」へのまなざしも-北広島市のコミュニティ・スクールに期待する-	単著	2021年3月	北広島市緑陽中学校区コミュニティ・スクール委員会広報部編「緑陽中校区CSだより」	本稿は、北広島市コミュニティ・スクールの活動の一環として、現代における学校教育の課題である「不登校」について、どのように対応するかを、学校運営協議会委員の立場から述べたものである。ややもすると、「たくましい子」ばかりに目が行きがちで、「弱い子」への視点を欠落させている現状を、自分自身の家族の経験も踏まえ述べたものである。
３.生涯学習と地域の文化・芸術	単著	2021年3月	恵庭市社会教育委員会編「ここから一歩」第82号	恵庭市にある縄文のカリンバ遺跡は、朱塗りの漆塗り櫛や腕輪等が大変多く出土する全国的に有名な遺跡である。カリンバの縄文人には、鮮やかな彩色と芸術性への感性が脈打っていたことを物語るものであり、縄文文化に対するイメージを覆す遺跡である。この遺跡を、より多くの地域のひとびとに知ってもらうため、学生とともにフィールドワークを行った。本稿はそのプロセスを社会教育委員の立場から紹介したものである。
４．第5期恵庭市生涯学習基本計画の策定を終えて	単著	2021年3月	恵庭市社会教育委員会編「ここから一歩」第82号	筆者は恵庭市社会教育委員、生涯学習委員として現在至るまで、2期4年間活動してきた。その1期目の集大成として、「第5期恵庭市生涯学習基本計画」を、他の委員とともにワークショップに参加しながらまとめた。本稿は、市民協働のワークショップにおける活動と、恵庭地域の文化遺産の継承に関する意義について考察したものである。